

働くことの意義

三重県・三重県立桑名西高等学校 2年 穂坂 喬子

私には父親がいない。私が中学1年生の時に母より愛する女性ができ私たちの前から去ってしまったのだ。

父を失ってしまった今、私には明るくしっかり者の母親と陽気で元気な姉がいる。世間でいうところの一般的な家族ではないが、毎日楽しく暮らし、とりたてて自分が不幸だとか寂しいとか感じたことはなかった。

だが社会的、世間一般的な見解では、父親の欠落した家庭というのは一段格下に貶められることが多々あり、時々世間の大きく高い壁にぶち当たり、やり切れなさを感じているのは事実だ。

中学2年生の頃、「家を建てる」ということで、いろいろな不動産屋や、住宅展示場を廻っていた。ある大手住宅メーカーの分譲住宅地を見学に行った時のことだ。会場で母が、「予約をしていた穂坂だが、案内をお願いしたい」と言うと、受付の人が「御主人様はどこか」と尋ねられ、母は夫はいないこと、世帯主は自分であることを説明した。すると、係の人は怪訝な顔をし、「ロビーで暫し待て」とだけ言って私たちの前を去った。後から来た家族が次々と案内されていくのを横目に見つつ、かなりの時間を待たされた。その結果が「担当者が今不在なので後日改めて連絡する」だった。

予約していたこと、遠方から来ていることを言い、他の人でも良いので案内して欲しいと訴えたが「後日改めて」という言葉は変わらなかった。

帰り道、いつもは明るい母が「予約してあったのに……。無駄足になってしまった。悪かった」と呟いた。その後ろ姿は少し寂しげだった。何もできない私は、ただ黙っているしかなかった。

その後、家庭の事情を理解してくれる住宅メーカーに巡りあい現在の家を建てることになった。その担当者は、当時中学生の私に、

「家を建てるというのは、本当に大変で、男性でも難しいことだ。ましてや君のお母さんは女性だ。並大抵な努力ではない。私たちはお母さんという人間を信用し、信頼しているから建築を請け負う。立派なお母さんを持って君は幸せだ。」

と言った。

私は、本当に嬉しかった。冷たい世間にも私たちを理解してくれる人もいるのだと。

それまで私たち母子を誰も相手にしないと危惧していた。しかし、当人が一生懸命努力さえすれば大きく高い壁は乗り越えられる。

それでは、なぜ人が母を信用するかという理由は、母の職にある。母は公務員で勤続 20 年になる。その堅実な職業、20 年という長い間の忍耐力を評価しているのだ。母がこの職になれば、やはり誰も相手にしないだろう。

職業という私はいつも壺井栄の小説『二十四の瞳』¹⁾を思い出す。戦争という嵐の中で、夫、母、娘、を失い、2 人の子を抱え、途方に暮れる寡婦大石先生を救ったのは、^{ほか}他ならぬ自分自身の身についた教職という資格だった。

また、他の 12 人の生徒の生き方、特に女子を見ると、親まかせ、あなたまかせの人生を選択した子は、親に売られたり、結核で死んだり幸福になった子は少ない。

しかし一方、教員や産婆になり、手に職をつけた子たちは、オールドミスと言われても明るく健康そのものだ。

戦前のそれも、戦争中という時代背景と現代社会を比較することは容易ではないが、職業というのは自分自身を救い、自立するためのセーフティネットだと思う。昭和の時代、寡婦である大石先生を救ったのも教職という職であれば、平成の時代、2 人の娘を抱えたシングルマザーである母を救ったのも公務員という職業だ。

私は今高校生で、自分自身の将来を決定するための試行錯誤をかさねている。自分自身何になりたいか、また、何ができるのかを熟考すると、看護師という職業につきたいと思うようになった。

看護師、昔は看護婦といい、女性の天職ともいわれその白衣姿に女の子は一度はあこがれるといっても過言ではない。

しかし、現実には、あこがれとはうらはらに、最初の関門の看護科の大学の入学は、難しい。国公立大だと 8 倍の倍率だ。そして資格取得のための国家試験も難関だ。

また、やっと看護師になっても、その仕事は激務であり、精神的にも、肉体的にも厳しいらしい。

私は、看護師という職業の理解をより深めるため、今年の夏休み、看護大学のオープンキャンパスに参加するだけでなく、“看護師 1 日体験”という一種の体験学習に応募し、実際に病院で働いてみた。

働くといっても、ほとんど役にもたたない足手まといにすぎず、患者の方の食事の介助や、^{はい}配膳のお手伝いをしたにすぎない。だが実際やってみると、意外に難しく、また立ちづめで足がむくみ、見るのと、やるのは、全く違うと実感し、あこがれだけでは、とてもなれない職業だと痛感した。

しかし、こんなたよりない私にも、「ありがとう」と、声をかけて下さったり、患者さんの笑顔を見たりすると、疲れもふっ飛ぶような気がした。

また、看護師さんの働く姿をまぢかに拝見しそのキビキビとした動作、態度に接することができありがたかった。

私は、この貴重な体験学習を通して、“看護師になりたい”という夢が一層強くなった。

“働く”ということは、“はた（周り）を楽にしてあげることだ”とも言われている。自分自身

の運命を切り拓くためだけではなく、自分自身を救い、周りの人をも助ける、そんな職業につきたい。そのためには、看護師になりたい。

一度しかない人生、私は、自分自身の人生を納得できるよう切り拓くためにも一層努力したい。

事務局注 1) 壺井栄 『二十四の瞳』 角川文庫、1961年

